

1 章 はじめに

(1) 計画の背景と位置づけ

安中市では、「選ばれる安中市」に躍進するために多様な施策を展開しており、その一つとして、横川駅周辺を計画予定地とした、『観光や防災に寄与する市内初の「道の駅」』の実現に向けて取り組んでおります。

安中市には、碓氷峠の近代化遺産をはじめ多くの魅力ある観光資源がありますが、観光入込客数が県内 12 市中最低ランクなど、観光振興の強化が課題となっています。そこで、道の駅を安中観光の玄関口の一つとして整備することにより、多くの観光客が訪れ、碓氷峠の歴史に触れられ、自然に親しむ「安中ブランド」観光周遊を充実させることができ、碓氷峠周辺をはじめとした安中市全体の観光振興を図ることが期待されます。

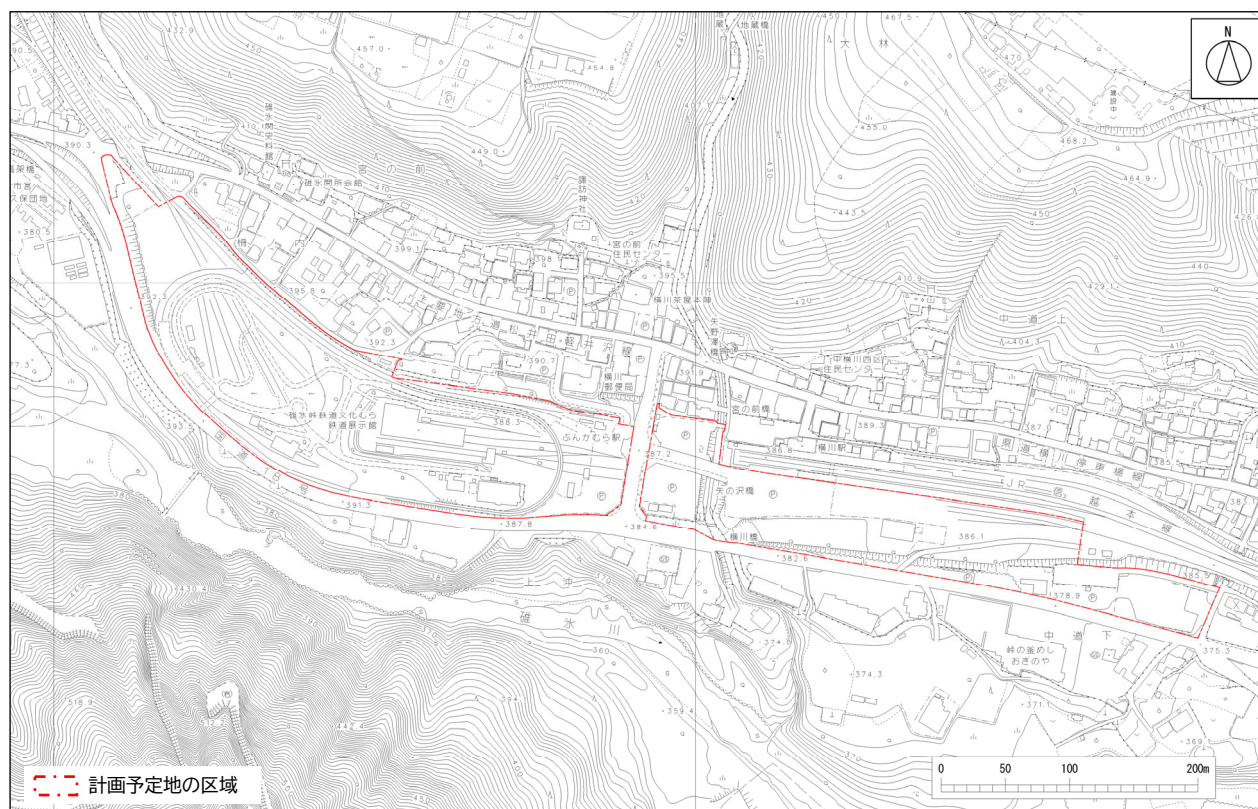
令和 6 年 3 月に策定した『安中市「道の駅」基本構想』（以下「基本構想」といいます。）において、道の駅整備の目的や効果、及び想定されるターゲットや導入機能などの方向性を示すとともに、有識者や関係する団体及び事業者などで構成する「安中市道の駅整備検討委員会（以下「検討委員会」といいます。）」で検討・協議を重ね、関係する団体及び事業者、市民の皆様などからの意見を取り入れながら道の駅の整備のあり方について議論を進めてきました。

本計画は安中市で初となる道の駅の整備に向けて、基本理念、導入機能及び規模などの計画条件を整理のうえ、地域特性を活かし、競争力のある特徴的な道の駅とするための整備内容を示すものです。

計画予定地の区域は、現在は公共バスが発着するロータリーや駐車場、倉庫などとして活用されている JR 信越本線横川駅南側の土地に、安中市において唯一のテーマパークである碓氷峠鉄道文化むら（以下「文化むら」といいます。）をあわせるかを検討します。

計画予定地の周囲には、国道 18 号沿道の商業施設や旧中山道沿道の歴史的資源、碓氷川、矢の沢川、妙義山などの自然資源、上信越自動車道の横川 SA が立地しています。さらには文化むらから遊歩道アプトの道で訪れることができる丸山変電所やめがね橋などの碓氷峠鉄道施設群、宿泊・温泉施設、碓氷湖、霧積温泉などの豊富な観光資源にもアクセスしやすい位置にあります。

以上の立地条件をふまえ、計画予定地だけでなく、周辺の観光資源や施設と機能を分担し、一体的に誘客することにより、碓氷峠周辺の活性化を図ることも含めて検討します。



図：計画予定地の区域

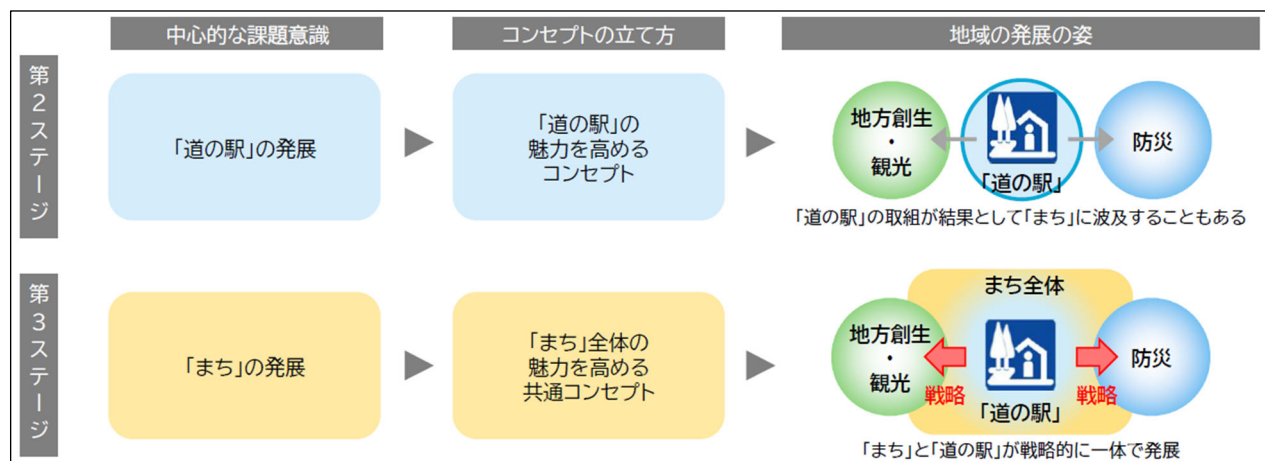
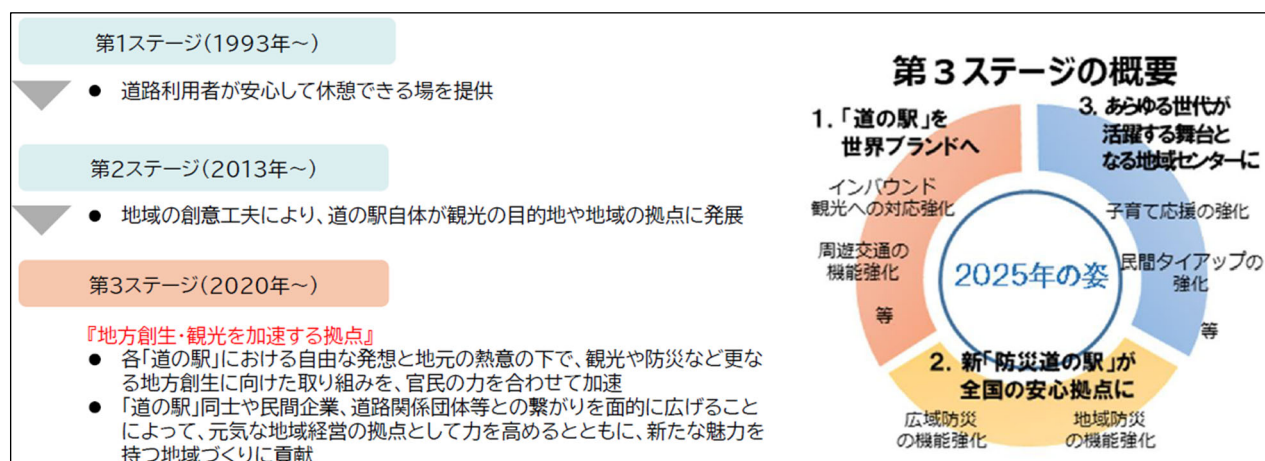
(3)「道の駅」制度の概要

平成4（1993）年の「道の駅」制度の創設以降、各地域がそれぞれ工夫を凝らすことにより、令和6（2024）年8月時点、全国各地で1,221箇所の多様な「道の駅」が誕生しています。はじめは通過する道路利用者へのサービス提供が主たる機能でしたが、「道の駅」の持つ地域との連携機能は次第に役割を増し、「道の駅」自体が目的地となるような箇所も増えてきています。

このような変遷は「第1ステージ」「第2ステージ」と呼称され、令和2（2020）年からは「地方創生・観光を加速する拠点」を目指す「第3ステージ」が進行中です。これらのステージは切り替わるものではなく、「道の駅」の機能が拡張され、かつ高度化してきた変遷を表します。

前段の第2ステージでは、「道の駅」を魅力的にすることで結果として地方創生に寄与する取り組みであったのに対し、第3ステージでは「まち全体」を中心にコンセプトを共有し、「まち」と「道の駅」が戦略的に一体で進める取り組みとなっています。

第3ステージ始動以後、新型コロナウイルス感染症流行、令和6年能登半島地震をはじめとした全国各地での自然災害など、さまざまな社会情勢の変化を経験しました。これから益々、「まち」と「道の駅」が一体となり、戦略的に取り組みを進め発展していくことが求められていきます。本計画では、道の駅が置かれているこれらの状況を念頭に置きながら検討を行いました。



上図：「道の駅」第3ステージの概念、下図：「道の駅」第2・第3ステージの違い

（出典：「道の駅」第3ステージ 中間レビューと今後の方向性（「道の駅」第3ステージ推進委員会、令和6年7月））